

ノーベル賞受賞や国民栄誉賞の受賞など、日本に明るい話題が続いています。これらの受賞者に共通するのは、いずれも弛まぬ努力が大きな功績として称えられている点です。しかし功績のみならず、奇蹟的な体験や境遇もまた、日々の積み重ねの成果として発揮されるケースがあるのです。

経営者の 氏夫妻は、休日と一緒にバイクで出かけるなど、周囲からはおしどり夫婦と呼ばれる仲の良さです。そんな夫妻が、三重県の伊勢神宮へバイクで出かけた時のことです。高速道路をスピードを上げて走行していたところ、突如として大型トラックが車線変更してきたのです。

氏は咄嗟に中央分離帯付近へ乗り上げ、なんとかハンドルを持ち堪えました。トラックが過ぎ去り、車線へ戻ると、ハンドルの利かないバイクはすぐに横転し、氏は道路に飛び出て転がり、夫人も道路へ滑り込むような形で倒れたのです。

道路上に倒れている 氏を見た夫人は、一瞬「死」という思いがよぎりました。しかし次の瞬間、氏は何とか起き上がったのです。そして座り込んでいる夫人に、「怖い思いをさせてごめんね」と言葉をかけ、すぐに事故の処理にあたったのです。

奇蹟的に後続の車は来ず、また 氏の柔道の経験も幸いし、ライダーズーツはボロボロになったものの、腕の擦り傷だけで済みました。病院に搬送された後も、数十分で治療は終わりました。バッグの中に持参していたスーツに着替え、夫人に「じゃあ伊勢神宮に行こうか」と言ってレンタカー



善行の積み重ねが 運命をも変える

を借りたのです。

そして何事もなかったかのように翌朝、御垣内参拝を行なった後に帰宅しました。

後日、事故を振り返った氏は、「初めての事故でしたが、冷静でした」とし、自身の心境を淡々と語りました。

「トラックを責める気はありません。自分は事故を起こさないものだ、いい気になっていたんです。日頃、妻に心配ばかりかけていたことも改めて気づかされました」

氏は毎朝三時に起床する朝起きの実践と、夫婦で正座し、名前を呼び合い、握手を交わすなどの朝の挨拶をしています。

朝起き一つですが、 氏自身の揺るぎない心境を培い、事故に遭った際の冷静な対処へとつながったのでしよう。夫婦のつながりを大切にしていることも、命のつながりを堅く結んだ要因かもしれません。

倫理研究所・丸山竹秋会長は次のように語ります。

毎日一回でも小さな「よいと」をやっていると、いざという時に大きな「よいと」ができる。平生行なわずして、どうしていざという時にできるものか。この「日」に一度が大きな意味をもつてくるのであり、終始一貫のたゆみなき実践によつて、重大な場面に遭遇した時、難しいことが奇蹟的にもやっつけられる。

日々の積み重ねが運命を切り拓きます。誰もその人生において、いずれは重大な場面がやってくるものです。「ここぞ」という場面に力を発揮できるように、日々の実践に磨きをかけ、揺るぎない信念を培いたいものです。

絵・今谷鉄柱